伏見
俊成忠則
草紙洗小町
松虫
石橋
八

伏見

絲ーーーーーーーーーーー下ーーーハーー下ーーーー

遊ひし直成神宿でく宮路や

絶跡なるらん抑是は藤原の後

都とは我にみし俗を和別云日の明

神は氏の神ならは所に住み河原にまし

宿はりてたりの頃記事紛らぬ今

下向道またしは宇治より川舟まかり

伏見の社にまいらばやと存候

朝日影さすや三笠の山高く

さほの川霧立こめて末遠の秋

も稔ぬる四方の恵も時めきて

てずを行清ハ泉川河風さむき

宇治の里近くハ見えて猶遠く

伏見山にも着にけり

ワキ詞

急候程にはや伏見山に着て候心静に

社参申さばやと存候

一セイ二人

さほ錦く露の萩草花ひらく也

秋気色かげ見えも山路の秋なれや

伏見の沢の秋水天下界に捨て

五の穀豊品多き人男女生まれ

てゆとくいくさ川瀬の音もそうさや波

静なる御代は天照神の末を請て
うけ伝ての末へらざる国も治まる民静
なる秋ほまちくも治る君の恵の故ぞかし
ぞ又み宮ハ所も九重みぞ近き伏見の宮
治まる御代のなほ豊かへまつりも道有
代の君にあひめでたき時
ともやぬさいさおちく手向まつく

年久の秋なれや まへらにの菊代を
に海より草くげうりさる行ひらけ
山ぞ後も梅もぞうけれまくそうさしけ
あしや民とし靡くそうそ称じき地
の君又天君おそれ給くみより給と
あきか洲君の歳久しくことうきつ
まくめでたき君が老人なるとそ

やまとハ紫いろ紅にほふところ家ゐまで
まふさかりなる白菊のごとなる花
の種とやまとへうつりし花の在所
く社人へいつくより一手折て参らせ
さんなれは白きハ伏見の山岩谷水
のほとりにおひしかど神よりも向の島
に一手折おてハうつてやれかし

其花とやさしくも老人の持る花
なるぞかしとや翁草といふ事をしらぬか
げにあさきいやうに社人　実くきくぞ
ハ翁草とハやさしや又かうるなる花
と申は伏見の里の翁草で候
うる在所の有けるに　いふハ伏見
の里で必哥人のよみける在所にて

かゝりける所に伏見の翁といひし
人ぞ花をば植ゑて伏見山に出で給ひ
ば翁が身のさかしきしめよりより世におほ
わらく思はぬこゝろより 思ふは伏見の
翁の事禁裏雲井の上人おはしけれ
ともしろしめさるべききき 古へ桓武
天皇の御代伏見の里に宮作りの翁

人歌を出して一首の哥を詠じければ
御門叡感甚しくて伏見の翁と召され
しより これは昔の伏見の翁がれい
に住みて伏見の里に 今もなりて御射り
より有りおはします程 翁草と
はめされて名も白菊と名付
世はさりあくい海士の里草と成ける

おもしろや實に殊なるかな宮やしろ
に住人とらどのつゆもちらぬ心まで
猶よりける有様しぞも此花に手向
といふが有様當社の為なるべしぞ
此宮井はいつきの神ぞて是は猶也
の御新所御様の御姫こそ宮井
さればにや名をもいはぬ其社し宮

くはしくわかちはしらずよそにほひこ
とある宮柱の鳥居をあきらかに
垣に玉のむら菊そへて神
前に掛る手向草の名も
厨かぎりなしあさきくの花や伏見
の翁草しあつゆはつゆそへておこ衣
墨きざみ立まよふそはひしせん

ゐへぬ納受をはかされしと思ふかうくら
あさてまゐる月乃都人まゐりは志んらん
はへく 上歌 あまねく伏見乃翁の妻
はおはへ 松 伏見乃翁まざめを
久かたの天照ます神乃代より此方
うけてくんとうを守るふうとうや
御代は仁王代々をへて時雨ぬりと

きらなる月乃名にのみおほ空や地て
しくて稲りつくや雲乃上花乃都
乃雲井平安城に治まり中に
も伏見乃宮作り御家を守る神慮
志るやあこ乃浦まちくも四海乃も
ちよも静かに仁王五十代桓武天皇
乃はそ宇かとよ其伏見での里に

猶ゝ猶のひて大宮作りたちしめつく
皇居を定めたまひし伏見の翁は
詠じていざここに我世は経なん菅
原や伏見の里の荒れまくも惜しと
あつかひきるとかや我らは後うらあざるに
こゝろつくしを重ねての言とはれ
我は神風や伊勢乃なかこの浦の波

續るれ代の為なるん伏見にことそ見れ
しらぐん捨人に出へしとのれ非勅
を住きる大宮作りしまゐ杉伏見と
いそ身はずまするのみ想なるかくざし
あさいざなこのづお岩船の昔
遊ぶ娘して天てらすきみは伏見とも
名付まみしげ遍きは今や玉富豊ら

みちくさも我世にあひ竹の伏見の
里を守らんとこれに移しうゝる萬
歳まさるの都にある松宮や伏
見の古へのかく神まつりの神楽
の心をもあらたなる有羅や拍節月晴て
和光の影もあきらけきの古への京都
伏見のゆめをさめもなく宿の伏見
宮ぢらめでたき代を今にあらはして
見てまつへする主殿に今の翁
なりとて翁は天よりも金色の光
さしてそ庭にさらくて伏見玄里
のあまたまくをわしと思ふ故文や
作りあらわれ我は伏見の翁なる
けれ代を守りやまりごみも千代

ま伊勢へしと申捨てうきよにきりや
や捨て失にきり都に帰り神勅
ぞかくとしくわる奏しければ梅しと
いでいお山を音楽の声して異香
くんじる事あり女ある寺れれく
臣下る羅乃官位乃やいまた数とろ
思はれ代々をもちりのせいぎんに伏見

乃翁も我も志んぞそれ伊勢乃
海あこぎの浦に宮井しらせきん
女文乃姿をあらはしごうへ乃神とい
我る也　宮有難やてよひしも天晴
雲も細りてめぐくもある夜神楽
まことや庭火もてりそひてかざさ
まの霜の白妙にて　立てるや花

色むら菊の　むらきえの雪　尾花
さりの空雲　月まつや伏見乃沢
れ秋の水　竹田も見へていなりの空の
深草の野べいなり山乃紅葉乃秋
も柳桜乃花乃都いくよもあかで
へうくや平安城の有様や
げにもや明けゆく天乃戸よりくぞも

そへてさやの月まちと流るめてさよ
おなよりも秋代や代いねきえまろ原や伏え
乃里を守らんと又洲山にあらし伏
見れ翁あるとうや宗名と銘と神の
代乃首を今ひろ久をある其海の
乃波出霧　あかりいまりし種ちや
今をゆらぬ秋津洲乃其神乃

代乃おさまりいはひあきらいさまさの
岩枝よぬして尺出ありし故み伏
見しとれはちを名付そめらる神乃
代芸跡あさらかふ今ぞ天下太
平乃まつりことぞ伏見乃翁
草ハ雪をめくらしや草乃袖万歳
乃は代よつへらん

俊成忠則

加様よ候者ハ武蔵国乃住人岡部
乃六弥太忠澄にて候扨も今
度西海乃合戦よ薩摩守忠則を
ば某か手に懸まいらせて候御最期の
時箙を見申せば短冊乃付候
よ承へハ五条乃三位俊成卿と私

歌の御直しに遇ひし由申せば同じく此短冊を持
てまゐり俊成に此旨申さばやと思ひ
候いかに案内申候
トモ ナレモ 誰にてわたり候ぞ
早 是ハ此六弥太忠澄にて候ふが
御入候へ
モ 心得申候
後成 何と
ふさく御目に
トモ 岡部の六弥太忠澄の
後 此方へと申候へ
トモ 畏つて候 此方へ御参り候へ
早 心得申候
後 いかに忠澄珍しくも召しとハ何の為に来り
給ひて候ぞ
ワキ さん候只今参る事
別の儀にてもなし西海の合戦に薩
摩守忠度をば某が手にかけ申して候ひ
しが御箙の内に此短冊の候ひつるを見候へば
短冊の候ひつるを見候へば忠度とは書かれて候

次
一ハ二二
行くまて
ここにこの下りけ

和哥の御値遇の由承るか御目に
かけさやとお知己今をもちてま
いけて後けふ方へ給りしに宣やうら鳥
の道まてもねとくりの世に名の残るたし
置給ひし気色にて行きて猿猴の紀
やら見えく行き着てあれは下かけさ
宿もまたあらやと青葉の宮あかしなし

上哥
痛はしや忠則破戒むさんの罪
をおかしつゝ義礼智信五つの道もたゞ
さつくし寄首道よ専者らゆえよ
家あまねくく文武二道の忠則の
舩にてえ波岸の堂よりいり行く
袖やくやとも猶も思ひけり
うむしの文の雲にまとへ八重の塩

路かよふ身はまれにもおもひ重ねて末に
ひかるゝに蝶も花の姿をうつす面影
やみぢにつらし命なき心よかりまよふもの
行かよふ猪のぞのうかゝるきこめ中よ
俊成の忠度にも是ほどまでも久
不思儀やまどろむ夢にたちありつる
薩摩ノ守忠度の御姿あらはれ給ふ

きけるよ、忠度千載集に一首の哥
をぞ入させ給へども御名はいかにさもし
讀人志らずとかゝれし事心にかゝり
さりともそれはまさしく朝敵の
なれはさのみは世のきこえもや
然るにとかく御名をかくされけるを
思し御心を安くおぼしめせ 秋も

かゝりとまで宮乃ぶかき世にも哥
あらハ
俊 こきれを流石なりけりな
とがれもあし我人の情さも深き
をしふみぐさの
俊 げや詠哥を心あれば
古今乃苑と云鑑みて、かゝ波や志
賀乃都をあれわたりぞくむすぶらう
乃山桜われとをかへしもなかれ世のぼ

まてをのつは、詠哥うるぎまことやう
き世ん電光影小蝶乃夢のたわむ
れ、まきりぐるはやまへや津乃ほまれ
なよ波花支も忠則ありうらいう
ませ縁よあるまきうるいつ色絵よな
俊サシ ちよそ哥ハ六義あり是六
道なんちまきは誠ちぐやかれ非、

代の奇いぞし此杖をもてはじめ
ことを彼天照太神乃御いろせ
すさのをのみことより三十一字よりはじめ
とぞ此世まで代乃ためしとや異
しかるに素盞烏乃みことよを
をんじ出雲國にかまへ大
宮作りを前しに八雲乃宮居を

御作りて見ことは一首の御詠
かく八雲たつ出雲八重垣
つまごめに八重垣つくる其八重
垣をと神詠をと申なり今此世
乃歌のはじめ梅も秋須戸のうら
に猿寝ともあやかれ明石のうらの
船旁とよみしを思ひやられたり

人麿世よなくなりて哥のことゝゞまる
ふれど紀貫之も躬恒もかくこそ
出きさうかとも和歌の望はちらさむ
まりみつうらおもく鳴の鳥の跡
あし其ほどへどもつきせぬ言の葉
の哥よハ神も納受の男女夫婦の
睦ごとも此哥の情あるべし甚ねがは

わが夜の契りやかりつきやみ
まで忠則がまよひかゝりて気躁き
有様これぞもしろさうやしつき
御院をよ閻羅王の梵天より貴のお
於て帝釈もあひ修羅王でとの
下界にあれまはべ敵陣をみされ
あひくだおきかりきへ忠則も頭

悪乃焔は芝蘭の波のうちを損し
切かゝる罪人敵人鉾を持つてかう
罪人なし忠則あれは自ら打たれて
そのまゝみえし敵をこうむれはこれ
てたゝは天より火車降りかゝり
是鉄刀あてゝつゝ其身もたまる
からきめかゝる修羅王にせきあげはいゝに

涼しや風すゝかり波やぶ志
花の都はあれみむれむかしあれし記
採かと梵天大蔵御身より劔の責
を受れてくやうとめかれは燈を背
きそ反をかふ悔心深夜の月影の暗
ては同しく打払年代玄乃夜を
かずやもりくと鳴るれどありけれ

姿かきえ〳〵と有つる姿ハまほろし
乃嵐にちりてなりとかれ
てうおよ本り

八段

さうし洗

ワキ詞
是ハ大伴乃黒主にて候扨も明日
内裏にて御歌合有へしとて黒主
か相手ニハ小野小町を御定候
小町と申ハ歌よ上手にて候ほどに
よハかなふましく候明日の歌を
定て吟する事の有へし彼私宅へ

忍入哥を聞ちやとなり行　哥は
〳〵哥は代みあまりとを寿ほよ聖徳太
子は救世の觀聞片岡山乃せいを語
世にひろめ給ふ梅も明良門裏みちく
御うたあはせあるべきとて小町か相
手にはくろぬしを定められ
て水邊乃草といふ題を給り

ありげなるころや水邊乃草と云題
かうひらく作はいつにまかまに何を
猶ところ浮草は代波のうへにあらし
〳〵〳〵なるらし哥をやりて短冊に写させ
こん　如何に小町乃哥をやすく有如
何し作る哥とくいか　何を盗てあるぞ
まつあつくは其事を猶とて風にはなの

皇のうねをまろにて乃むあるく願し
いやた枯れそてハあさそで道の乃たち
うた常乃道よハあらぬ志まるを知ちく
乃こす不得心なる事みゆへとも
おほく海乃寄せを万葉の章紙よう
川しべ帝へかね奇と衛へ内日若
御奇合よりるりやとあけ めそてる

き御代の奇合きく詠して手ミこ
をあゆりむ時しもはる卯月あわさ
清涼殿乃御会あれもおやうた
うそみえたりきれかくて人丸赤
人まい御歎せうきとのく積る
短冊とてこれもくと和歌しじ歌乃
前がう置たりせう依御おれ人

人々ハ　小町をもとめ行に
乃みつね紀乃とものり　右衛門乃府
生壬生乃忠岑　ひとりびとりに召
されて　流子詠をそも待ける
ほのぐとあかしの浦乃朝霧に島
がくれゆく舟をしそ思ふ　家持の歌に
入月さんぐく　淡路乃あふ嶋まや

はじめて哥の道にも心やりつく道を
されば其哥人の名前ごじ皆席上にならぶ
ねかに君乃宣旨の御物語まちなく
いかに貫之　御前よりの　もとめられ
小町か相手よハ黒主をと定たりさ
こよろり哥を讃よ作へ　畏て候欤
身乃すまざまかれくて行をしをとてう

き草此頃乃う猶くゝもをしふころし
みそゝろとよみたる歌やけ此歌に猶
るいよをもあへし皆と詠しけへ昌らくけ
皆け是ハ古歌ありくは何と古歌
かく申かハ川し作いつに小町おもり
とらく古歌を洗ひて愧かしや勅定
かくて代乃むかしハうたしきら侍院う

衣通姫は一首の乃なるほしうをたまひ
きかゝみゆらむ二首をそれ給ひ御津
まつ明神よりこのかた清け首をとり
あむしわりさかよみ此歌をそれ在歌と
作者ハ古と今此まで勅撰あらくはかる
最乃おもく賀やし作者ハ猶あらく
まゝかはそこ歎待く作乃ことく哉

此歌も明まりてハつらく如奏申
為さバ草子ハ万葉題なる最水鳥の
事とよみまされども讀人志らずと哥
左まきハ作者ハ雅さをなきあり
一 或記万葉ハ奈良の天子乃臣宗撰者
為橘乃諸兄哥乃様ハ七子首はなし
ては猶わかりハのまとめ哥ハさまでもなし

万葉集といふ草子に様々の代々の作り
おかれ侍りけるを社家へ 一 哀くされたる
仍るす新古今の去年より御歌ハ哀
通姫の流あれハあはれむ哥なく
つよからぬ古哥をさき重ハ道理
あり 一 柿ハあとハつよく人の猿丸
大夫の哥あれバ猿猴の名とは

て我名の金前よ立てぞやまりを
是は古今なれば　苑の陰ゆくやま
賤の　是さ海いやしき身なれ
ば古今とは申さめや　かく
文集をもさこそあやまらめ。
富士の裾野の大将や四病八病の
八部おのづから　詞も加はるの

やまりは　口もくれかれ　有るべし
上哥
不思議や古今未代まで二十一字な
こちらも一字も加へてよみたる哥
思ひ万葉の哥なれば和哥の浦
思ひのうちは恋哥をも落つるの首
魂も下りしかば　初めは立ち去れ
も恋をもあはと見しるらく百人は涼

しかるに此草子に今の歌あり
さらばそれにより見あくれば誠
才よみあまりぬ歌人さへ過ちはある此
ましてや小町が心のうち
かくらぶれば紛きあのなきうらみこそあ
やさきこゝろハ恥かしや
此道の大祖柿乃もとのまうちぎみ

さればば小町とハ捨ちて紛よりぞ出めや
万葉集古今集なりとて是は大臣
其外乃づゝのみや女房たちも小町
独りかなしみ人ハ夢よこ見る心ちして
がいの有さま心うればし草子をさらう
よのましハ綱乃次第もよころかく
よ字乃墨付居ぢうかの柄小町

独り詠をして黒主立聞し帝へ
古歌と称へ申さむ為万葉集に
入筆したるをあらはしたりけり
されはかゝりけるへおきよろこひ
うきをもむすひあき洗双紙をあらはれ
まやと思ひ給ふ 黒主 小町は左様によせ在
ぞしみさわぐおきつるはあまたに哀の

風情なり されはかくよりとも白まれ
をさもやあらんあさましのりよ
あらく立まとひて素性首をもち
人めもなくやや悔るや 黒主 小町猶
御前へ罷ぞ奏聞申さする
みれはいつて奏聞申せは小町とのれ
此今の万葉集のかきよせとよく

又仮名は行書を草書
まへ文字の書つゞきをたゞして
仮名よ草書あらひて書見
よしや仮
あらく 王 小町か申
あらはしあらひて見よとや
仮し 貫 是てはつた小町勅宣
なしあるそばひて草子をとる

ひさ 綸言なれはすぐさ
落ち涙の玉は漆きとして恥かし
うちにもうちて流双紙であらひと
貫之 和哥はちうたのをしは学く取よ分
うけくとをむ 天の川瀬を渡せ
志人 秋の七日の夜也
の 梅の香ひや

上ゲ はやりの雛の翅はさしが枝まれと

あときえぬりはかりけれは顔は耳

せすかりしを濁れる墨はさえもなし

ふれを 舊苔の鬚をあらひしを

水底よ解けうる氷 雲の歌をかけし

この露乃袖ときめよ やまとの歌の

流れいく 跡も見えさる水鳥の足毛

の空にあらはむすまきの霜よりなほうすし

或の歌の文字あまた見えし墨は書きたる乃まま

きえ 洞は袖よりうかむもかの文字も

乱るく見えし草も乃かされ 人数の

歌は数くは 漣ぞ見えさきれは

秋底乃歌る樹の 庭火よ袖を

かかはれ 時雨よぬれてあらけし

露の身のおき所なり　住吉の久
しき松にあらねども　岸うつ浪も寄る波の
立ち帰り思ふ心を歌ひしに　清書をするぞ紅
あまてらすみかみつさやこいてぞ松の
ことさら作者も題をも字余りをも
せきみちのくへ筆あらはれける
あまれどし一字を消して消えにけり

有がたや出雲ましまし　玉津海
人丸赤人の御めぐみと受けたまふ
懐しく龍顔よりあまるや　継
如何に業平がはぢの恥辱とかや
し自宮をもさらむと思ひ立　有の獨
げに清くも君ひとりなれ　給ふなり
色々の花衣　そしての首をそなへ　あかむ

心ありげに袖をかざし社参かな　王「いつて思

主　黒「御前をまかり　王「道を嗜む者か

誰もかうこそあるべきぞ　ゆるすなり

両人座へ直るべし　黒「是又時の面目あるまじく

宣旨といひて背くべきにあらずと御前に参る

地上「実ありがたき君の恵み小町黒主道

恨もなく小町は舞を奏せよとぞめく

立よりまふのうちきぬかざし折烏帽子

き物申しさやく拍子をそろへあふぎすゝめ

シテ上「春宵にくむ盃の是桃花の水

上地「石よりわきてそゝぐあめり　シテ「夜

汲まるゝ盃の一枝　地「月もえ夜ぶかき

さそふ袖の　シテ下「霞そへて遠山

地上「かすむる袖をほのめかす日数にこゝろ松

長き世ハ松に千代ある四海乃波も静かに
乃國も民も豊かなる御代とぞ
舞楽乃佳例あらたむる年の始めを
げにうらうねの出ありそさ乃ふるさとの時
天照る神乃國なれば花の都も長
閑なる御代乃静まりて皆豊かなる和歌乃
道こそめでたけれ

松虫

ワキ詞

是ハ津乃國阿部野乃あたりに住居
仕る者にて候我此あたりの市に
出て酒を賣て家を富ミ候處に
又若き男の数多来り酒をのミ遊
いつも酒宴をなしてかへり候が
少し不審なる事の候間今日も来りて候

わびつゝもあまりそと名をや書ねはやさ惜

ことの秋ぞと松虫の音にぞや

友を待つらん　秋乃風身にしむまゝよ

長月の有明の霜さむき朝の務に袖寒き

所は市人の来伴ひ出て秋の道の辺乃辺に

末葉乃露を深みより立つまゝや色

色の衰代衣目に出て行くへの市路に出て

ありし遠里まで狂ひさしけやすき

浪寄する汀も塩風も吹や岸

野の秋草章く松を響きてわかれ

良き友ありて当て友なりてそ市立ちされ

かれとも招きを何くもゆくへ野末

原の面白やな　傳へ聞く白楽天の

酒功讃を作りし詩酒の友に

志ゝからく市座敷よ稼をもつて世をおさ
まりへてよろしき人と御名たりしいゝに
人は酒をよ売る我宿なるの菊つる市に
あるよからも雲方のかふく人はゐてもなき
請しも故人あることに成ていつにへる
面のよ醸酒を汲みくみて売しける
まことに彼人乃住所をやまよみいはんよのよも

酒をたゝへ遊楽舞楽乃和哥を詠し
人寄心を慰め給へとやうちかゝり給はん
そのとよ　行雲も早やまれのつりなれとよ
中々の千蔭を移れは月もよも見えて
絵するよ　木蔭をもなしありしにそらくの
ば酒友をもて見捨てまじきと詠みしに
乃をとよ　帰る事をも忘れけり

（シテ上ヲキ）蘇景より花と作りけり　杯の前に
酔をすゝめてハ見しまゝれの坊さもし
いつより　とは秋の風おもふ酒乃
みぎりも楽しきく花のえだに
（シテ）ばうしてまとはれ　たゞ御酒とあれ
（上ヲ同）きみハ候　縦さかるなぐく我友乃友よあれ
夜ハ松に清する月影乃移る花のうへ

ちかの露盛るも山もたる色も移りゆく草
（シテ）かりの世乃秋する限りしや松虫の音も
偲ぶみし瑤生生れのつれも友ぞ（シテ）友
よしや買ひても市乃だまりあれく
（ワキ詞）いかに申候　唯今の言葉のすゑに松虫の
音に友を偲ぶと承り候ふ　いはれある事か
おしへ候へ　（シテ詞）ありし人をまたしに付て物語の候

かゝるやさしき事の候へは物語
候へ　シテ　昔此阿倍野の松原をある
人二人つれて通りしに折節松虫の
声おもしろく聞えしかは一人の友かの
虫の音を慕ひ行しに今一人の
友人良久しく待てとも帰らさりし
ほとに心もとなく思ひ尋ね見れは

彼者草に露に臥してむなしく成ぬ
一所とこそ思ひしにこはそも何と行し
なきかなしめともそのかひなくして
其まゝ土中に埋れ木の人志れ
ぬ思ひを今に残して松虫の
音に友を忍ぶの友よはなるゝそかし
なれや今をしてこの友を待のひらく

松むしのゞく音はかりそのわらく市人の
ばかりゐきゝてあさの跡に亡霊家に帰り
たる魂魄や見えしともなくもうらたち
市人の友がほにかげに隠れてあべ野の
かゝりし後もなつかしき懐しき
ては此世をおなじみちすがらのあつ
ばほどの友人のなつかしさの

給へ打折帯秋の草松虫をともなひて
我をや待声あらん今もこの友ありや
むしの音の松風ともに群る機織
うらめ言葉の虫の鳴く声を
友をはまつまたまを友ともまたるけ
我めやどに帰り出たるも古塚
みえし秋の野草人まれなる古塚の

あり　我もそれにて帰らんと夢の
めんめんの人々の錦や見えて酒宴の遊び
思ふ事よも松虫の声に伴ひてかへり
その虫の声よりも松風
寒き此原草の葉の夕露の
さる(?)野辺にて友(?)を待てば夢は誠の跡も
なき(?)ものを　音をあらはす風吹

ひやうひやうと秋霜に枯れ行きて
閻浮の枕の恐れ心頼む郊原よりて猶
髑髏露に白く朽ちたる跡をも見せ
然るにその者の影も見えぬ
かくれ行き夜露深き方より見えつ
影の無き身の行方も知らず
なき世をやよそにしてむなしき友を待ちて

まつ虫の音もさしあはれにてまたこ
茂る草の葉 浦の難波のさとを
ちかき あへの市人訪ひて その
人を こころある一樽 いつも人待つ
かきたれても 古郷を偲ふみわ難波
人々 芦火たく屋も市屋形ものかたり
おちこちまりて 市の学家も ちからねとも

うかりける身の心や まことに我
ゝか
ちとせめくらし古人の 馴をかさねし離
波まもとれよりあはれを実搆そむき
友ならめや あはれ落葉を踏みてあ
ひ伴ひつゝいつ夕暮の鳥をまちて
一時を隔る 数をしらぬ松の緑の暖
遅速風月の友に誘はれて春の山鳥遊や

秋の野に松虫の声もかな

ことの友かなや一樹の陰の宿り

も他生の縁ぞかし一河の流れを汲

てしるぞ心汲めや奥山の深谷の

下る山の菊の水汲めども汲めどもよも尽き

き流れの盃の手をまねく心

あはれなりし廬山のいにしへを思ひ

ぬ室の戸其戒を破りしも理

陶淵明が思ひの露の菊の遠流に

て道をきりや虎渓にいつの

昔もいさこゝにきて道ある友人の教

かゝる積善の余慶ありて善くこそ

道とかや乱れぬ濁世の人間にはいて

あさましや衰へゆく心もとなや古も

さゝへ竹葉の其皆えゝりかゝ我
ひとり酔をしきて萬木皆紅葉せり
只松むしの獨り寢に友をまち酔て
おりて舞かれて遊ばん ありがたの
露とも白露の花の袖 わすろや猶
りすゞ虫の音の ちらいちおもの
きりはたりちやう きりはたりちやう

つゞりさせてふ蟋蟀蜩 色々の色音の
中にわきて我偲ぶ松むしの聲
りんりんりんりんとして夜の聲めいめいたり
すはや難波の鐘も明方のあさま
になりぬべし さらばよ友人名残の袖を
まねく尾花のほのかに見えし跡たえて
草ぼう〳〵たるあしたの原〳〵

ちうたあそびのふねにのりの音もしか
見るや颯々の声は音計やのこゑの舞

石橋

ワキ 是ハ大江の定基といはれし寂照法師にて候我入唐渡天し彼方此方を拝み廻り只今清涼山に来りて候是にみえたる石橋にて有げに候暫く人をまち委く尋候て此橋をわたらうずるにて候

シテ 松風の花を薪に吹そへて

ゐらく雪をさしまさる山路かな　山路に
日数ふる樵歌牧笛の声人間万事様々の
世をわたりゆく身の有様物ごとにさえ
ぎる眼の前光の陰をや送るらん
遥かに山を遠く来て雲又跡を立へて
入りつる方も白雲のはやく谷の門をさし雨
とかくおもへく松若風そめにや疑つ

て半日の客たりしを今身の上にぞ
思ひ知らく　いかに是なる山人に尋ね
申べき事の候　何事にて御入候ぞ
是なるハ聞及たる石橋にて候か　御尋は
これ社石橋よ　向ひは文殊の浄
土清涼山よく〳〵御拝み候へ　扨ハ
石橋にて候ひけるぞや　さらば身命

さも細力にはありてし此橋を渡らんやと思
ひ給ひ　暫くはずみをこぎ給ふ
高僧達も難行苦行捨身の行にて
実にも月日を送り給ひて往橋を
わたり給ひしよ　獅子は小虫をく
らんとても先いきほひをなすとこそ聞けば我
法力はあまねしとてげにあやふき石の橋
をあやふくも渡らんとや言語あやう
し此河の事や　猶をよくかたりやさ
尋常の行人は左右なくかなはぬ橋よ
なよ　遥に見渡せば此瀧波の雲より落
て数千丈瀧つぼの底は霧深うして身
の毛もよだつ谷深み　巌峨々たる
岩石に　渡るは苔むす石の橋　苔滑

かゝりて見えをたまはず　流るゝハ月
もられ心もそらや　うつゝなるらし
乃橋ぐしまれ隠しきよ橋をかけ
おゆきもうめハ此橋れぞそこハ人かよふ
まして下ハ泥梨をたつ波の虚空わ
まつかすかにおもひやまも見られ心を
きえ々とおぼかへりけはろきの行人ハ思

ひとよふなるに　抑橋乃謂者ハ
物語申へし　夫天地開闢のこのかたハ雨露
をくだし国土をわたるぞ則あめの浮
橋ともいへり　其外国土世界にをひ
て橋乃名所さまざまにして水波の難を
のかれ萬民とめる世をわたるも即
橋乃徳とかや　然るに此石橋と申ハ人

間乃渡せる橋にあらずおのづと出現したる橋なれバ石橋と名を名付たりその面ハ尺よりハせばうして苔ハなハだ滑かなり其長さ三丈余谷ハそくばく深き事千丈余りおよべり上ハ滝の糸雲より懸りて下ハ泥梨も白浪の音ハ嵐にひゞき合ひ山河震動し雨ハつちくれをうごかすこのせわ橋ハききしにまされる雲にそびゆる梯とも見へてたとへハ夕陽乃雨乃後に虹をなせる姿又弓をひけるかたちなりはるかに谷をのぞめバあし冷しく肝きえすゝむ事かなはず神変仏力にあらずハ誰か此橋を渡るべき向ハ文殊の

浄土にも常に笙歌の花降てせうちや
くきんくご夕日の雲にきこゆ目前の
奇特あらたなりしばらく待給へや影
向の時節も今幾程によも過じ

乱

獅子とらでんの舞楽のみぎん牡丹の
花ぶさにほひみち〳〵大きんりきのしゝがしら
うてやはやせや牡丹芳〳〵

きんずい顕れて花にたはむれ枝にふし
まろびげにも上なき獅子王のいきほひ
なびかぬ草木もなき時なれや万歳千
秋と舞おさめ万歳千秋と舞納めて
獅子の座にこそなをりけれ

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也

寛政十一己未歳弥生

天保十一庚子歳孟春改正再板

皇都二條通御幸町西入町

山本長兵衛